

# ボランティアについて思うこと

立山町立釜ヶ淵小学校

教 諭 十松 大顕

## 1 生き方の構えをつくる学級経営

学校生活において、どんな場面で、どのような力を付け、学年の終わりにはどんな気概をもった子供たちに育てあげたいのかという構想を描くことが、学級の柱をもつことになる。

短い朝の時間であっても、35週積み重なれば、かなりの時間となる。それらの時間が、有機的に他の時間と結びつけば、さらに大きな影響力をもつようになる。言い換えれば、学級の柱の一本になるという考えである。

そのため、ボランティア、「くらしのたしかめ」といった時間は、どのように運用され、子供たちが、本気で夢中になって、どんな生き方の構えをつくっていくのだろうか、再考する必要があると考える。

## 2 子供たちの捉えるボランティア

ボランティアの時間は、子供たちにどのように捉えられていたのでしょうか。

本日、1・5年生による「くらしのたしかめ」の時間を通して、子供たちの本音が聞かれたと思う。花の成長に楽しみを見出し、水やりを行うK（1）さん。様々な仕事ができることに喜びを見付けるT（1）さん。決められたことをやるのは楽だが、自分で見付けて決める（自己決定）のを面倒くさいと感じるT（5）さん。他者にどう思われるのか気にしながら取り組むS（5）さん等。

一人一人や学年で、これまでどんなことを思ったり感じたりしながら、ボランティアに取り組んできたかが分かったと思う。「単なる掃除の延長＝ボランティア」なのか。そうであれば、木曜日に2回もあるのは、おかしいということになる。しかし、「ボランティア＝他者のために取り組む活動」と捉えれば、視野がぐんと広まり、どんなことが他者のためになるのか考える過程で、いろいろな種類の個性的な取組が生まれてくるだろう。想像的で、独創的な営みになることもあるだろう。

## 3 主体的であること

現在のボランティアは、主体的に行われているのだろうか。

自発的—自主的—自立的—自律的な動きに進化しながら、相対的に主体的に取り組む力が付いていく。

まずは、ボランティアの時間を、子供たちは楽しんでいるか。勢いよく教室をとび出ていくか。何かしてやろうと、わくわくしながら出ていくか。楽しんでいないようなら第1段階である。自分の中に、目当てややりたいことが明確にあるから、スムーズなスタートを切れることになる。内なるエネルギーがなければ、何をやってもダメである。

次に、見通しをもって、継続的に取り組むようになる。自分を試すために、何かにチャレンジしたがる。相手意識も強くなっていく。当然、他者評価も、気になり始める。他者のためだという意識が出てくる。第2段階である。ギャングエイジである中学年では、途中から友達と手を組んで、中ぐらいの動きをつくり出すこともある。遊びの要素を取り入れ、夢中になって取り組むことが最も適している時期である。

最後に、他者の範囲を地域に広げ、学校全体に影響を及ぼそうと呼びかけようとするようになる。遊びの色合いは薄れ、文化的なおおいがしてくるようになる。教師との駆け引きをしていくようになる。「こんなことをしたい私たちなのですが、〇〇にチャレン

ジさせてもらえませんか」等と言って、大きな動きをつくるようになる。第3段階であり、子供たちは、一人立ちしてくる。

第3段階になれば、掃除であれ、委員会やクラブ活動であれ、子供たちは、主体的な動きをするようになる。「今日の掃除は、この場所を重点に、〇〇な掃除をしよう」「今日の委員会は、〇〇な動きをつくりたいので、△△（具体的動き）をしよう」等と前もって、自然に言える高学年になってくる。やらされている感が薄まり、進んで取り組むようになる。また、自分たちの取り組んだ成果を振り返り、次の取組に生かそうとするようになる。

#### 4 止まって見ること

速く動いている自動車から、外の景色は見えるが、はっきりとは見えない。見えているつもりだけである。子供も、自動車と同じである。学校におけるくらしの課題が、あまり見えていない。

毎日、トイレのスリッパを見る。本棚の整理整頓の様子を見る。どんどん大きくなっていく農園や花壇の草を見る。何か動きたくなるまで、見ればいいのである。止まって見ることで課題が見付き、自分の目当てをもって取り組むようになる。人を見る。例えば、1年生を見続ける。課題が見えてくる。課題解決に向けて、どんな関わり方をしようか。「大きな迷路をつくって、入学したての1年生を学校に馴染ませたい」「ぼくは、あいさつで安心させてあげたい。そのために、〇〇なあいさつをしよう」といった目当てをもって、チャレンジしてもよい。

とにかく、止まって見る時間を確保することである。雑念を捨て、静かな心で見る時間をもつことである。時間がないと言って、慌ててスタートを切れば、その後、何倍もの時間をかけて修復しなければならなくなるので、気を付ける。

#### 5 意識すること

子供たちの心は、湿った薪のようなものである。一旦火が着くと、勢いよく燃え、子供たちはがんばろうと動き出す。しかし、全ての子供の心に同時に火が着くことはない。共通の場で、互いの考えを交流する場が必要となる。「くらしのたしかめ」の時間である。事実を基に、互いの感情を共有するだけでも、価値ある交流となる。潜在する意識を顕在化させるのである。そのような交流の後では、子供たちの動きは、必ず変化してくる。子供たちは、何かを心にひっかけ、動き出す。やがて、継続する過程で、その行為の意味や価値観を自身に問うようになってくる。そのような動きを大切にしたい。

#### 6 ふだん思うこと

「おはようございます」と声を出す自動販売機がある。日によって気分がいいとか悪いとかいうことがないのが長所だ。一方、近所の店で買い物をする時は、店のおばさんが毎日ちがう声をかけてくれるので楽しい。

高学年を担当する時、どこの学校でもあいさつ運動をすることになる。「あいさつは、大切である」「あいさつは、心の窓になる」等と言われて、子供たちは担当を決め、下級生や先生に向けてあいさつをする。「おはようございます」とただ大きな声で、自動販売機のように、あいさつを繰り返す。評価者は、高学年の担当者である。それでいいのだろうか。まず、自分自身を評価しなくてはいけないのではないか。近所のおばさんになるには、自分たちは具体的にどうすればよいのだろうか。

多くの子供たちは、担当場所を通り過ぎると、その後はあいさつをしない。問題は、玄関という関所ではなく、通過後の道中にある。ここに目を付ければ、あいさつへの取

組方は大きく変わってくる。子供たちに工夫する姿が見えてくる。やがて、あいさつの本質が見えてくるのだ。

ボランティアであれ「くらしのたしかめ」であれ、教師がその行為や時間の本質を捉えることで、個性的な子供の動きが生まれ、生き生きとした子供の姿が見られるようになるのではないかと考える。